

地域アソシエーションの芽(59)

京都大学名誉教授 本山 美彦

土をめぐる勢力(5)

旱魃への備え



金子信博 教授



穏やかな気候風土に恵まれた日本の水田

穏やかな気候風土に恵まれた日本の水田
耕地についても、耕起栽培こそ世界
にそうである。



温暖化で日本も旱魃や渇水
が増えると予想されている

カナダでは1991年に33パーセント、2001年には60パーセントの農場が不耕起栽培(土を耕さない農法)を採用するようになつた。

「耕してはいけない」などと言われたら、2千年にわたって土壤を破壊せずに水田を維持してきたことを誇りにしている日本人のほとんどが、「何を史である。森林が豊かな

馬鹿なことを言つている!」と怒りを覚えるだろう。確かに日本は、米国と異なり豊かな水田を維持してきた。しかし、ここで私たちが気付かねばならないことは、日本の気候には欧米や中東のようないくつかの特徴がある。

なにか一つ挙げると、それは「旱魃(ひづけ)」だ。旱魃は、日本では「不耕起栽培」で、米国では「カバークロップ栽培」と呼ばれる。これは、土の表面を覆うために使われる植物を用いるが、自然農のように雑草を活かすのは、日本ならではの方法である。

「日本では不耕起を実践している農家は全体のわずか%と、まだまだ少ない。普及が進まないのは、日本では『耕さないといけない』という考え方

が根強いというのも原因の1つ」。

それでも、日本にも、「自然農や自然栽培をベースにした不耕起・草生農法」(雑草を除草せず、それらの根を利用して農地の土壤を管理する方法)が芽生えつつある。

「不耕起栽培は、除草するのではなく、草を資源としてうまく活用し

「乗用の機械で管理ができるようにならないと収益を上げるのは難しい。

「近年の米国の有機不耕起栽培では、大型トラクターでライ麦の茎を高速で押し倒す。押し倒されたライ麦の茎が雑草の発生を抑えてくれる」。

「日本では不耕起を実践している農家は全体のわずか%と、まだまだ少ない。普及が進まないのは、日本では『耕さないといけない』という考え方

が根強いというのも原因の1つ」。

「雑草は農業の宿敵と見なされがちだが、耕すことによって、作物と競争するような種類が生える。不耕起にすると、雑草も作物もお互いの成長を邪魔しない植物相になつてしまふ。つまり、草が生えても収穫量は落ちない。ただし、その領域に到達するまでは大変なので、最初は有機栽培でライ麦などをカバー・クロップとして播くことを勧めたい」。

「乗用の機械で管理ができるようにならないと収益を上げるのは難しい。同氏は、福島県二本松市「あだたら食農School farm」の不耕起草生区の活動に力を入れている」といふ。

大型機械は日本では使えない。そのまま小型化しても構造上、実用は難しい。メカニカル作業欲しき機械の機能は、草を刈つてそのままマルチ(土の表面を覆う材)としてそ

の役割は、軽視されても構造上、実用は難しい。メカニカルに作って欲しい。議論が展開され、身に付けなければならぬ議論を理解する能力をもつて、私は心底から思う。

社会資本政策研究会

〒651-1412 大阪市東淀川区淡路三一六一三一
兵庫県西宮市山口町下山口六五二一
協同会館アソシエ一階
電話(06)四八六二一四〇二二
FAX(06)四八六二一四〇二三

サンセイ生コンクリート株式会社

代表取締役 稲 村 義 昭

〒651-1412 兵庫県西宮市山口町下山口六五二一
電話(06)九〇四一三六九一
FAX(06)九〇四一二一〇七



「あだたら食農School farm」では、耕作放棄地を活用し、有機栽培や不耕起栽培などを学ぶことができる

関西生コン関連
経営者会

関連団体を支援する会
K U

吉野建設 株式会社

提言文芸

~投稿歓迎~

・裏金があるなら、それを被災地に

(荒馬宗介)
・ミサイルで地震は防げぬ分からんか?
(憲法窮状)

なかなか進まぬ被災地支援です。被災者支援には「財源が...」と言いますが、ミサイル購入には「財源が...」とは絶対に言いませんねえ。いつの事、何億円もある裏金が被災地支援に回してみいかがでしょうか。収支報告書にも使い道をはつきり記せますよ。